

オルガンを担いで箱根越え —ヤマハ創業者 山葉寅楠—

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

明治初期に学制が発布され、尋常小学校に修身、算術、読本などと並んで唱歌の授業が設けられた。文明開化の一環として西洋音楽の学習が奨励され、もっとも適した楽器としてオルガンが選ばれる。ところがオルガンは高価な外国製品のみで容易に手に入らず理想的な音楽教育は有名無実のものとなりかけていた。

そんなときヤマハの創業者となる山葉寅楠やまはとらくす(1851-1916)によって史上初の国産オルガンが誕生する。資金も製造技術も音楽の知識もまるでなかった山葉はそれでもあきらめることなく鋼はがねのような意志で最後までやり遂げた。

やがて国産第1号のアップライトピアノも完成させ、世界に名を轟かすヤマハ・ブランドの原型を築く。彼がいなかったら日本の音楽の夜明けはもっと遅れていたといっても過言ではない。

西洋の技術を学び浜松へ

山葉は紀州藩士の三男として現在の和歌山市で生まれた。寅楠という名前は南北朝時代の武将で大楠公と崇められた楠木正成くすのきまさしげに由来しているという。

父が藩の天文係を務めていたことから、家には天体観測、土地測量、土木設計に関する書物や機材がたくさんあった。手先の器用な山葉は幼い頃から機械いじりを遊び代わりにしていた。

少年時代は剣術に没頭し、剣術家の道を歩もう

と16歳で奈良に出て修行に励む。のちに会社を興してから社員と剣術の稽古に汗を流した。

明治維新を迎えて士族が没落すると再出発を期して長崎へ赴き、連射式のスペンサー銃や顕微鏡など西洋の高度な技術にふれて衝撃を受ける。イギリス人の技師から時計の製造・修繕技術を学んだのち大阪の河内屋医療機械店に就職し、住み込みで働いて一人前の修理工となる。医療機器の仕事を選んだのは近代的な医療の発展に貢献したいと願ったからだ。

1884年、静岡県浜松市の浜松病院から医療機器の修理を依頼されて山葉が派遣される。宿の6畳間を借りて浜松病院に通い、仕事を終えたあとも地域の住民から時計や機械器具の修理を請け負うようになった。

1887年、35歳になった山葉は浜松尋常小学校からオルガンの修理を打診される。地元出身の貿易商社員がアメリカから輸入して寄付した貴重なオルガンは米1斗(20kg)が1円の時代に45円もした。教室に鍵をかけて厳重に保管され、見物客が絶えないので参観許可証まで用意されていた。それが突然、音を出さなくなってしまったのだ。



山葉寅楠

困り果てた校長はついに山葉に白羽の矢を立てた。

試作品が不評で音楽の猛勉強

修理に向いた山葉は慎重にメイソン社製のオルガンを点検して故障の原因をすぐに探りあてた。バネが2本破損していたのだ。全体の構造と部品を図面に書き写しながらオルガンづくりへの意欲が猛然と湧いてきた。「これくらいのオルガンなら自分は3円で作る自信がある」と豪語したという。高価な輸入品に代わって安価な国産品を全国の子供たちに届けたいという想いがあった。

試作にあたって貴金属を細工する飾り職人の河合喜三郎が私財を投じて支援した。工具や材料は河合が賄い、約2カ月で一気に試作品を完成させる。さっそく浜松尋常小学校の教師らに弾いてもらったところ音程がバラバラで不評だった。

納得のいかない山葉と河合は文部省の音楽取調所、現在の東京芸術大学で審査を受けることにした。浜松まで鉄道は開通しておらず、ふたりは天秤棒でオルガンを担いで出発する。大八車で運ぶと振動で壊れる恐れがあった。

100kg近いオルガンを担いで250km余りの道のりを踏破するのは並大抵のことではない。強風にあおられたり、雨で足止めを余儀なくされながら坂道のつづく「天下の嶮げん」で有名な箱根の難所を越えた。

ようやく辿りつくと旅装も解かず所長の伊沢修二と面会して評価を仰ぐ。伊沢は形がよくても調律が不正確で使用に耐えないと手きびしく判定した。それでも山葉の熱意に打たれ、無料で宿泊所を提供し、特別聴講生として講義を受けることを許可した。山葉は約1カ月間、音楽の基礎理論や調律法を必死で学んだ。

浜松に戻ると河合の家に同居して朝5時から深夜まで第2号の製作に没頭する。音を出す金属片のリードは真鍮板を切って代用し、弁は合金して1枚ずつ鑢やすりにかけ、鍵盤に張るセルロイドの代わりに三味線のバチや裁縫用の牛骨のヘラを磨いて使った。河合夫婦は親戚中をまわって借金し、家財道具も売り払って費用を捻出した。

辛酸を舐めて第2号を完成させると、ふたりはふたたび天秤棒で担いで伊沢を再訪する。伊沢は

「欠点はことごとく取り除かれた。舶来に代わりうるものだ」と太鼓判を押した。ふたりは言葉もなく涙を流し、国産初のオルガンを寄贈した。

成功しても恩義を忘れず

伊沢のお墨付きでオルガンは評判を呼び、静岡県庁や静岡師範学校から注文が舞い込んだ。値段は海外製品の約半額で「私は品物を販売するのに駆け引きはせぬ。生産費を控除して値段を定め、決して暴利をとらない」と宣言した。

注文は急増して1889年、廃寺の庫裏を改造してヤマハの母体となる合資会社・山葉風琴製造所を設立。当時、オルガンは足のペダルで風を送って音を鳴らすことから風琴と呼ばれた。2年後に出資者の離反で解散に追い込まれたものの、すぐに山葉楽器製造所を立ち上げて輸出事業を開始し、イギリスや東南アジアへの実績を伸ばす。1897年、日本楽器製造株式会社を発足して社長に就任した。

次の課題はピアノの国産化だった。1899年に渡米し、5カ月間にわたってキンボール、メイソン&ハムリン、スタインウェイ&サンズなど約100カ所のピアノ工場を視察する。加工機械と部品を手に入れて帰国し、翌年からアップライトピアノの生産を開始した。

ピアノの命といわれるアクション=響板の開発は弟子の河合小市かわいこいちに託した。早熟で「発明小市」の異名をもつ河合はのちに河合楽器を創業する。

勢いのついた山葉は1902年にグランドピアノを完成させ、1904年のセントルイス万国博覧会にピアノとオルガンを出品して名誉大賞を受賞する。ハーモニカや木琴の国産化にも成功し、晩年は浜松市の市議員を務めて地域の振興に尽くした。

地元の名士になっても若き日に支えてくれた河合喜三郎への恩義を忘れることはなかった。経営が軌道に乗ると真っ先に河合の家を新築させ、子供のいない河合夫婦のために長男を養子に出している。

社員が病気になると足繁く見舞い、給料に治療費を加えて渡したりした。本質的に律儀、厳格、几帳面な性格で私生活では家族と談笑することも稀だった。どんなに親しい友人と話していても決して膝をくずさなかった。